**説教20240204一コリ2：1-11マタイ5：13-20「義の太陽が輝くとき」**

**先週の火曜日から三日間、栄光園で、日本キリスト教児童福祉連盟主催の中堅職員研修が行われました。私は、初めと終わりの礼拝説教の御奉仕を担わさせて頂きました。参加者には若い人も多くて、彼彼女らの様子や表情を見ていますと、私には次のような思いが浮かんできました。**

**小さな子どもたちというのは、永遠に続く愛を、自然に求めています。中堅職員の方々は今、現場で、そんな子どもたちと日々接する中で、喜んだり悲しんだり、傷ついたり癒されたりする生の体験を重ねておられることでしょう。永遠の愛はそんな中で子供たちに伝えられていく事でしょう。愛は、現場で、人から人へと伝えられていきますが、永遠の愛を作り出してくれるのはイエス様です。**

**愛を伝える人は、自分自身が先ずイエス様の愛を知っていて、自分を愛してくれるイエス様の愛に応答する愛を養うことが必要です。この私がイエス様と相思相愛の関係にあることこそが、永遠の愛の成就なのです。**

**今の世は、大人も子供も愛に飢えている時代です。愛に飢えて、間違った道に踏み込んでしまった人たちは、間違った知恵を学び、それを身に着けてしまいます。小児性愛などは悪い愛の最たるものです。悪い愛は、子どもたちが、永遠に続く愛を慕い求める心を破壊するために用いられます。どうか世代間にわたるこの悪い連鎖が、終わりますように。**

**イエス様は、この世を救うために、まさに命を賭けて私たちの処に来て下さいました。この世に生きる私たちも、命を賭けて、イエス様との相思相愛の愛を深めつつ、その永遠の愛を隣りにいる人たちに伝えて行きましょう。**

**その為には、各施設で行われている礼拝をみんなが大切にして、主イエスに向かって喜びの叫びをあげる礼拝を、子どもも大人も集まって守っていきましょう。**

**こういうことでしたが、それでは今日の聖書箇所を見て行きましょう。**

**今日のマタイ福音書には先ず、塩の話が出て参ります。昔、塩は塩田と呼ばれるところで海の水を煮詰めて作られていました。その工程はでは工場の中で行われるのが主流です。聖書に出て来る塩は、岩塩、岩の塩のことだったと言われています。何れにしましても、塩は自然界における基本物質であり、もっともわかり易い、神さまからの目に見えるお恵みであります。**

**私たちは、日々、主イエスから塩を恵まれて、それを体に入れて、力が与えられています。塩は味付けにもなり、又、実際に栄養となって私たちを日々、養ってくれるのです。しかし、そんな命を保つ塩も、に過剰摂取すると体に異変が起こって死んでしまうこともあるそうです。**

**私たちはそんな塩を、適正に取り扱って、美味しく用いて、命の為に役立てるように、イエス様から言われています。もしそうしないなら、私たちは塩の為に、「外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられる」ようなさんざんな目に遭わされることでしょう。**

**次にイエス様は、世の光の話をされます。この世の光は様々に色とりどりに輝いています。現代では、世の光が野放図に増えてしまって、節操がない目障りなイルミネーションに幻滅させられることもありますが、聖書の時代にはそんなものはなかったことでしょう。聖書時代の背景の基本は、真っ暗闇であります。そんな真っ暗闇の世の中では、山の上にある町は、隠れることができないのです。そこに立つ家々の窓から漏れ出る室内の光の数々が、うすぼんやりと、その山の上のほうを見ている人のまぶたに映し出されると言った情景が思い起こされます。**

**そして家の中に入れば、そこに住む人たちは、真っ暗闇を照らすための貴重なともしびを当然、高いところにおいて、家の中の隅々までを照らそうとすることでしょう。この様に世の光を、適正に取り扱って、それを人々の前に輝かせるのは、私たち自身の行いによるのです。真っ暗闇を照らす光は、私たちの命に不可欠な物であります。この光も、又、主イエスからの御恵みとして、私たちに与えられ、私たちがその光を適正に取り扱っていく事を、神様は私たちに求められているのです。**

**続きまして、イエス様は「律法と預言者」の話をされます。**

**マタイ福音書5章 17節**

**わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思ってはならない。廃止するためではなく、完成するためである。**

**ここでは、律法や預言者となっていますが、この二つの語は、合わせて旧約聖書全体のことを言い表しています。もちろんこの時代には未だ新約聖書は編まれていませんでしたので、律法と預言者と言うのは聖書と言うこの書物を指していると言った方が良いかもしれません。**

**聖書では、それを読む私たちに考えさせるために、かえってはっきり言わずに、ほのめかす、と言う語り方もよくされています。この時、イエス様が、聖書と言わずに、それを律法や預言者と言ったのも、何かをほのめかしたかったからに違いありません。**

**例えば、家族のことを語る場合でも、家族のことを、親兄弟などと言い表したら、そこにまた違った含蓄が込められることでしょう。**

**もし、この5章 17節のイエス様の言葉を、「わたしが来たのは聖書を廃止するためだ、と思ってはならない。廃止するためではなく、完成するためである。」という様に語句をかえて読めば、みんなそれはそうだと思って、誰一人それに異を唱える者はおらず、みんな口をそろえてアーメンと言うことでしょう。でもそれでは話が終わってしまって、イエス様が伝えたかったことは伝わらないのです。**

**イエス様がこの時、弟子たちに知らせたかったことは、端的に言えば、律法学者やファリサイ派の人々の聖書の読み方、取り扱い方は、適正ではなく間違っている、という事実でした。イエス様は、この時、律法学者やファリサイ派の人々が犯している間違いを、弟子たちにほのめかすことによって気づかせようとされたのでした。**

**律法学者やファリサイ派の人々の聖書の読み方の一例を挙げますと、次の様になります。聖書は、安息日を清く保ち、この日には働いてはならないと定めています。このことが大原則ですが、律法学者たちは、それでは労働とは何なのかを具体的に逐一取り決め始めました。律法学者の律法では、「安息日に移動できる荷物は、乾いちじく一個分の重さ迄」とか、「子どもを抱き上げることの良し悪し」等について事細かな、小さな掟が、生活全般にわたって造り上げられました。そしてその掟によって、律法学者たちは厳罰主義をもって、人々の生活や命を律していったのでした。**

**この様な厳罰主義、、、律法主義とも言いますが、、、厳罰主義に縛られた当時の社会の状況を見て、イエス様は、当時の社会を主導し管理していた律法学者やファリサイ派の人々を当然批判することになります。しかし、イエス様は、最初から批判するのではなく、ほのめかすことから始められたのでした。**

**それはなぜかと言いますと、イエス様がこの地上で目指されたのは、律法学者やファリサイ派の人々の指導方針を変えさせる、というよりは、地上に暮らす人々が、その厳罰主義の愚かさに自ら気が付いて、人々の心が変えられて、その厳罰主義の罠から逃れることだったからです。**

**5章 19節でイエス様は「これらの最も小さな掟を一つでも破り、そうするようにと人に教える者は、天の国で最も小さい者と呼ばれる。」と言われていますが、この物言いは、律法学者たちの振舞いに対する一種の皮肉の思いも込められています。律法学者たちは、聖書を利用して、重箱の隅をつつくように掟を作って、人々を罰しました。こういった律法学者たちの振舞いを念頭に置いて、イエス様は、「これらの最も小さな掟を一つでも破り、そうするようにと人に教える者は、天の国で最も小さい者と呼ばれる。」と弟子たちに言われたのでした。実のところは、イエス様はこの時、弟子たちに、聖書全体に記されていることの一つひとつを大切にして、それを守りなさいと、勧められたのでした。**

**イエス様には、律法学者たちが、その時、行っていた聖書の読み方、取り扱い方では、恵みが少ないこと、ましてや永遠の命は恵まれないということが、はっきりと分かっていました。イエス様のこの時の願いは、聖書全体が御自分について書かれているのだ、ということを世の全ての人が知ることでした。（ルカ24：27）**

**天地が消えうせる終末のときは、必ずこの世にやって来ます。その時には、今日語られた、塩も、世の光も、そして書物としての聖書も、消え失せてしまいます。**

**しかし、その終末の時と言うのは、預言されています通り、イエスさまが再びやって来て、すべてが完成される時なのです。その時には書物としての聖書もイエスキリストご自身として完成されるのです。**

**この地上で生きる私たちもその終末の時に備えた歩みを、今、歩んでいます。**

**5章 20節**

**言っておくが、あなたがたの義が律法学者やファリサイ派の人々の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の国に入ることができない。」**

**このイエス様の御言葉は大変厳しく、私たちの耳に響いて参ります。**

**イエス様は、この様に語って、私たちに何を伝えようとされたのでしょうか。**

**律法学者やファリサイ派の人々は、当時の社会のエリートで、世の知恵に恵まれた人たちでした。彼らは社会の普通の人たちより、見るからに秀でた人たちだったでしょう。その普通の人たちにとって、律法学者やファリサイ派の義に勝る、ということは、それは無理なことですと言って、最初からあきらめてしまうようなことだったと思います。**

**イエス様はむしろこの時、人々にこの様に諦めさせて、自分の力で得られる義ではなく、イエス様から与えられる義を、御恵みとして祈り求めなさいと言っておられるようです。**

**イエス様から御恵みとして与えられる、神の義、神の正義は、私たちを永遠の命の道に導いて下さいます。そして、私たちが最後に永遠の命を手にするには、どうしても十字架の主イエスを通らねばなりません。私たちは、イエス様から与えられる痛みも、そして喜びも、その都度お恵みとして豊かに受け取って参りたいと願います。**

**いのり**

**父なる神よ、私たちは今、この聖書に記されている律法と愛が、御子イエスの再び来られる終末の時に完成することを待ち望んでいます。その時には、御子の言葉が、私たちの言葉となって、永遠の喜びの内に導いて下さることでしょう。**

**どうか、今を生きる私たちにも、御子イエスの御言葉を絶えず与え、教え、口ずさむようにして下さい。**

**言葉によってすべては形作られます。どうか私たちの家族、職場、遊び場、社会、共同体の全ての場所を、あなたの御言葉で守り、豊かに祝福して下さい。**

**私たちがこの礼拝の時を大切にし、日々礼拝し、最後まで礼拝する生活を続けていく事が出来ますように。あなたから与えられるお恵みによって、私たちが永遠の喜びに生きる者たちとなる事が出来ますように。**